

「遠野物語」、筆記された物語と〈親しく〉聞いた物語

——葉舟怪談における「装い」としての声

松 原 久 子

一、『遠野物語』の同時代評から

柳田國男は『遠野物語』（一九一〇）の序において、「此話は全て遠野の人佐々木鏡石君より聞いたものを「筆記」し、「一字一句をも加減せず感じたるまゝを書いたものだ」と述べた。さらに、訪れた遠野の風景や生活を紀行文的に記しながら、本作の内容について「目前の出来事なり」、「現在の事実なり」としている。軽んじられてきた怪談・奇談を取り上げるに際し、その内容を「現在の事実」だと謳うことで、『遠野物語』はむしろ怪談・奇談の権威化を図っているふしがある。

しかしながら、柳田の言説の主旨は、本書が佐々木鏡石（喜善）の語った話を「一字一句をも」加筆・削除をほどこすことなく筆記したということではなかった。むしろ、柳田は「感じたるまゝ」を筆録することに主眼を置いていた。東北の訛りを帯びた口語体であった喜善の言葉が、当時としては一般的な言葉に置き換えられていることから、『遠野物語』が喜善によって語られるままに筆記された書物ではないことは明白だ。柳田言うところの「一字一句も加減せず」という言葉は、具体的な地名・人名に至るまで喜善からもなく聞き出し、自ら感じたままを記録した本書の性格を物語っている。今日の研究でも、柳田が主体的な聞き手となって喜善に質問し、地名や人名などの空白を埋めることで本書が成立したこ

とが明らかになっている。⁽²⁾ 事実と寸分異なることのないように、度重なる推敲を経て成立した『遠野物語』の性格が示唆された文だといえる。

また、本文ではほとんど描写されない遠野の風景の多くが序によつて補完され、本書の成立と遠野訪問との関係も序のなかで示唆され、強調されている。『遠野物語』の序文は、本書成立の実態とは異なる内容を多く含み、『遠野物語』成立の経緯や刊行の意味に対する誤読・誤解を生じしやすい。序文が本書の印象や読みの方向性がある程度指示してしまうのである。

それゆえ、『遠野物語』出版当時発表された同時代評は、その多くが序文に強く影響を受けており、本書を正当に批評したものはきわめて少ないということになった。

次に引くのは、島崎藤村が『遠野物語』に宛てて書いた文章である。⁽³⁾

『遠野物語』は昨年の夏、柳田国男君が花巻の奥にある遠野郷に遊んだ時、旅から携へ帰つた土産話である。

斯の物語は、全部遠い地方の伝説を集めたものであることや、それが著者の序文にも有るやうに斯ういふ話を聞き、斯ういふ土地を見ては、人に話さずに居られないといふほど種々な興味深き事柄で充されて居ることや、簡潔で誠実な話し振りに加へた評語序文、題目などが、先づ私の心を惹いた。柳田君から寄贈された斯の異色ある冊子は私の前にある。丁度私は読み了つたところだ。そして、著者に対するやうに、斯の冊子に対して居るそのことを話さう。

藤村は、「著者が東北に旅して、遠野といふやうな淋しい地方で得た印象は、巻頭の序文の一節によく言い表してある」という言葉に続けて、『遠野物語』序文の一部を引き、柳田が「去年八月の末」に遠野の地に訪れたことや、その地方の様

子が紀行文的に描写されている部分を示したうえで次のように述べる。

斯ふいふ文章を読んで、それから山の神、姥神、山男、山女、又は著者の言ふごときマアテルリングの『侵入者』を想ひ起させるやうな不思議な、しかも活きた眼の前の物語に対すると、ルウラル、ライフの中に混じて見出される『驚異』と『恐怖』とを幽かに知ることが出来るやうな気がする。

藤村の『遠野』評は、「簡潔で誠実な話し振りからこれに加へた評語序文、題目などが、先づ私の心を惹いた」という点で、本書のもつ語りや構成の特徴に気づいている。

ただし、冒頭で「『遠野物語』は昨年の夏、柳田国男君が花巻の奥にある遠野郷に遊んだ時、旅から携へ帰った土産話」だとするのは、序文に引きずられた誤説である。『遠野物語』は実際のところ、旅先から持ち帰った話ではない。藤村の読みは、あくまで柳田の人物像や柳田自身の研究に対する興味を前提としたものであり、ここでは喜善という語り手の存在は無視されている。藤村は『遠野物語』を、観察力の富んだ旅行家・柳田が持ち帰った土産話として扱ったのだ。

また、遠野地方の印象が「巻頭の序文の一節によく言ひ表してある」として、序の紀行文を引用し、「活きた眼の前の物語に対すると、ルウラル、ライフの中に混じて見出される『驚異』と『恐怖』とを幽かに知ることが出来るやうな気がする」とも述べている。藤村がここで述べている「活きた眼の前の物語」とは、序文のみに示された紀行文の描写を指すのであろう。序文において示された、柳田による遠野地方の描写を前提として成立した藤村の遠野に対する解釈なのである。「活きた眼の前の物語」という評言も、「此は是目前の出来事なり」という言葉に導かれて用いられたと考えられる。出版の経緯や遠野訪問の時期から考えても、本書は実際に目にした風景や印象に基づいて成立した作品ではなかった。

ここで、『遠野物語』の序文に引きずられたわけではないが、『遠野物語』が喜善の語りに基づいて成立したことを無視

した批評として、花袋の文章を取り上げておこう。

異常なる事件必ずしも異常なる作品を成さない。平凡なる事件、必ずしも平凡なる作品を成さない。異常と平凡といふ風に単に材料の上で、現象を区別して見たくない。死も妖怪も時に由つては神秘でも何でも無い。異常なる事件も私は平凡なる事件として見たい。又書き度い。

印象主義は、客観的外面でなければならぬ性質を持つてゐるといふことを私は曾て言つた。印象主義は眼から入つて行つた芸術である。色彩を重んじ、刹那の感じを重んずるのも無理はない。

花袋は自身の創作姿勢を示したうえで、話題の中心は次第に『遠野物語』へと移つていく。

柳田君の『遠野物語』これにもさうした一種の印象的の匂ひがする。柳田君曰く、『君には僕の心持は解るまい。』又曰く、『君には批評する資格がない。』

粗野を気取つた贅沢。さう言つた風が到る処にある。私は其の物語に就いては、更に心を動かさないが、其物語の背景を塗るのに、飽まで實際を以てした処を面白いとも意味深いとも思つた。読んで印象的、芸術的のにはひのするのは、其内容よりも寧ろ其材料の取扱方にある。

花袋は、「書かれた」物語であることによつてもたらされる「印象的のにおい」を評価しており、それは無意識・無自覚的ながらも『遠野物語』の核心に迫る評価たりえた。『遠野物語』は、死や妖怪、そして神秘を「客観的外面」つまり「實際の観察」によつて描いたとしたのだ。しかし、その評価は、柳田の真意からはかけ離れたものであった。

花袋の『遠野』評は、あくまでも自身の批評基準に則ったものであり、「粗野を気取った贅沢」という的外れな批評に終始する。これは到底、『遠野物語』を正當に評価した言葉にはなりえなかった。

やがて自然主義を代表する作家となる藤村と花袋が『遠野物語』の限界を読み切れなかったことは、日本における自然主義文学の特異性を示唆し、二人の作家に対する評価の見直しにつながる要素を孕んでいる。ただしこの話題は、本稿の目的とは方向を異にするため、別稿を用意して触れたいと思う。

次いで、泉鏡花の『遠野物語』評を取り上げてみたい。「近ごろく、おもしろき書を読みたり。柳田國男氏の著、遠野物語なり」と書き出される「遠野の奇聞」と題した文章は、一見『遠野』評のごとく見えるが、実はそうではない。全編『遠野物語』に対する皮肉で貫かれ、鏡花の怪談・奇談に対する考えが表明されている。

此の書は、陸中国上閉伊郡に遠野郷とて、山深き幽僻地の、伝説異聞怪談を、土地の人が談話したるを、氏が筆にて活かし描けるなり。敢て活かし描けるものと言ふ。然らざれば、妖怪変化豈得て斯くの如く活躍せんや。⁽⁵⁾

鏡花による『遠野物語』評をどう捉えるべきかは、この「敢て活かし描ける」という言葉の受け取り方によって大きく異なる。石井正己は、鏡花が喜善の名前に触れなかったことを踏まえ、話し手である喜善の技量よりも、柳田の筆力を高く評価したと述べる。⁽⁶⁾ 鏡花の評を指して、「柳田が筆で活かし描いたから」こそ、「妖怪・変化が紙から抜け出して目の前で活躍するような躍動感が生まれた」という評価を石井は読み取っている。しかしこれには違和感がある。「活かし描ける」という言葉を繰り返し、二度目には「敢て」という語を付して「活かし描ける」と述べている。「敢て」という語には、「すすんで」「おしきつて」という意味を含んでいる。つまり、鏡花は「活かし描ける」という行為が何らかの意図に基づいて行われていると述べているのだ。

この「活かし描ける」とは鏡花一流の皮肉である。鏡花による柳田に対する皮肉は、以下の表現にも表れている。

此の書、はじめを其の地勢に起し、神の始、里の神、家の神等より、（中略）昔々の歌謡に至るまで、話題すべて一百十九。附馬牛の山男、閉伊川の淵の河童、恐しき息を吐き、怪しき水掻の音を立てて、紙上を抜け出で、眼前に顕る、。近來の快心事、類なき奇観なり。

昔より言ひ伝へて、隨筆雜記に佛を留め、やがて此の昭代に形を消さんとしたる山男も、又ために生命あるものとなりて、峰づたひに日光辺まで、のさ／＼と出で来らむとする概あり。

鏡花言うところの「紙上を抜け出で眼前に顕る、」とは、その描写の巧みさや躍動感を指しているのではない。山男が「日光辺までのさ／＼と出で来らむ」ように、妖怪變化が赤裸々に登場させられてしまった滑稽さを嘆いているのである。紙上に忽然とその姿を現し、書き表されてしまったことの氣まずさや恥ずかしさを説いているのだ。恐ろしさや幻想性は失われてしまい、系統立てられた妖怪の陳腐な姿が露呈してしまったのである。

また、鏡花の批評で特徴的なのは、書かれていない情景までもが現前してくると繰返し述べている点だ。

又此の物語を讀みて感ずる所は、事の奇と、ものの妖なるのみにあらず。其の土地の光景、風俗、草木の色などを不言の間に聞き得る事なり。^{あいだ}白望に茸を採りに行きて宿りし夜とあるにつけて、中空の氣勢も思はれ、茸狩る人の姿も偲ばる。^{しうみ}^{（？）}

『遠野物語』の本文には、奇事に関わる人物や地名、その日時は記されるものの、風景や情景を思い起こさせるような描

写はほとんどない。しかし鏡花は「不言の間」や「文字の外」から、土地の光景や風俗、草木の色をとらえ、読み取るというのだ。

これは柳田に向けた痛烈な皮肉である。柳田の文章からは「事の奇と、ものの妖なるのみ」しか読み取れず、その背景となるべき土地の風景やそこに住む人々の様子を伺い知ることはできないという。そういったものの一切を描けていない柳田の書きぶりを、鏡花は痛烈に批判しているのだ。

二、水野葉舟による『遠野物語』評

水野葉舟は、柳田に喜善を紹介した人物であり、『遠野物語』以前に喜善の語った遠野の話的文章にした人物でもある。葉舟は書簡を模した文体でもって、「これはこの書（論者注——『遠野物語』）に対する批評ではありません」とことわったうえで、『遠野』に対する「感想や記憶を書」⁽⁸⁾いている。自身が聞いた喜善の話の印象と、柳田の手による『遠野物語』を読んだ印象とを比較して、次のように語る。

この断片の話——これと言ふ系統のついで居ない、種々な人の、種々な方向に対する記憶が、それが、しかも話す人の思ひ出す儘に話して行つたものであるが、斯う一冊になつたものを読み了るとその後、遠野一帯の生活が彷彿として横はつて居る。僕はこの書を読み了つた時には、一種不思議な感じがした。僕はやはり、初めの通りに、フエヤリー、テールスを聞く気で読み始めたのに、読み了つてしまつた時には、山奥の或る部落の生活が頭に残つて居た、それと心付いた時に、僕は再び柳田氏が「自分の研究して居る問題に直接有効な材料だ」と言はれた言葉を思ひ出した、僕はたゞ何の中心もなく話して居る、佐々木君の話が、柳田氏の頭の中で、立派に順序が立つて此遠野の一縮図が宿

つて居た事を感じた。⁽⁹⁾

葉舟は、喜善から聞いた当初は「フエヤリー、テールス」という印象をもった話が、柳田が「一字一句をも加減せず感じたるまゝを」「筆記」したことで、「山奥の或る部落の生活」へと変容したことの驚きを伝えている。また、元は何の中心もない話であったものが、順序だった話へと変化していることにも言及している。その批評は、序文に影響されて本書の印象を語っていた藤村や、自身がもつ批評基準に拘泥した花袋とは根本的な違いをもつ。原話を知り、自身でも筆録化した葉舟は、柳田の『遠野物語』のもつ違和感に気付き、冷静な目でその変化を見据えているのだ。

最も注目すべきは、〈何を語ったか〉ではなく、〈どのように語ったか〉という点を葉舟が重く見ていることだろう。〈どのように語ったか〉という方法の違いが、喜善の話を「フエヤリー、テールス」にも、「山奥の或る部落の生活」にもするのである。

実際、葉舟が文章に遺した喜善の話は「山奥の或る部落の生活」などではなかった。問題なのは、葉舟の手による怪談が、『遠野物語』との比較を行うなかで取り上げられるばかりで、柳田研究の傍流としてしか扱われてこなかったことだ。「どのように語ったか」という点を重くみた葉舟の怪談は、単独で取り上げて論じるべき意義があるだろう。

水野葉舟は『遠野物語』成立前後に、喜善を始め、周囲の人たちから聞いた怪談話をいくつか書き遺している。

岩本由輝は、葉舟が遺した怪談に、『遠野物語』と共通する話が含まれていることに注目し、二者を比較して、それぞれの特徴を挙げている。⁽¹⁰⁾『遠野物語』は地名や人名などの固有名詞が明示されている一方、葉舟の文章は固有名詞を省略して書かれていると岩本は指摘する。さらに、喜善との「会話の形で展開されている」ことを根拠として、葉舟の方が喜善の「語り口を正確に伝えている印象」であると述べるのである。

それに対し石井正己は、喜善の話が失われている現在、岩本の論証が成り立たないものであり、葉舟の話が「聞きたる

まま」であるという保証は、どこにもない」と批判する。

石井が批判するように、会話のかたちで再現されているからといって、葉舟の作品が喜善の話に近いとは言い難い。その根拠として、『遠野物語』の一〇〇話と共通する内容の話として、葉舟が書き遺した次の三つの作品を挙げたい。¹²⁾

- ① 「怪談（Ⅱ）」（『趣味』一九〇九・六）
- ② 「狐に魅されし話の数々」第五話（『日本勸業銀行月報』一九〇九・一〇）
- ③ 「月夜峠」（泉鏡花序『怪談会』柏舎書楼、一九〇九・一〇）

ここに挙げた作品は、妻に化けた狐を殺す¹³⁾ という共通した筋をもつ。しかし展開が少し異なっていたり、登場人物の台詞が別のものであったりと、全く同じものというわけではない。¹³⁾ なにより、この三作は語り口が違っており、喜善の話をそのまま文字に起こした様子は見られないことから、葉舟の文章は喜善の話に近いというわけではなく、話者の語りの再現を装ったものでしかないと考えられる。

また、『遠野物語』と比較すべき葉舟の作品として忘れてはならないのが、「北国の人」（『新小説』一九〇八・二）である。「北国の人」は、葉舟と佐々木喜善との出会いを記したもので、おさめられた話のうちには『遠野物語』と共通するものもある。そのため、先行研究においては『遠野物語』との比較の対象として用いられてきた。

石井は「北国の人」を『遠野物語』と比較して取り上げ、「小説の前半は萩原（佐々木）の話を共通語を使って、デスマス体で書いていた」ことから、「一編の創作として見なければならぬ」と述べている。¹⁴⁾

「北国の人」において、葉舟と喜善が初対面の際、葉舟が耳にして理解できなかった喜善の言葉は、聞き取りづかったことを断りつつも、読者にとってはわかる言葉（共通語）で書かれていた。ここからは、喜善の言葉が聞き取り辛かった

状況を読者に説明すると同時に、話していた内容が理解できるように書き方の工夫が見て取れるのである。

ここまで、先行研究を確かめつつ、水野葉舟の怪談の特徴を確認してきた。しかし、従来の研究では、葉舟の怪談は『遠野物語』の特徴を浮かび上がらせるための比較の対象として用いられ、『遠野物語』に登場しない怪談は取り上げられていない。葉舟の怪談を『遠野物語』研究の比較の対象に留めるのではなく、作品自体の価値を確かめるためにも、葉舟の手による怪談を単独で取上げるべきである。

三、「親しく聞いた」葉舟の怪談

本章では、先行研究において取り上げられることの少なかった葉舟の怪談作品を取上げたい。今回取り上げるのは主に次の三作品である。^⑤

- ④ 「怪夢」(『趣味』一九〇八・六)
- ⑤ 「怪談(Ⅰ)」(『趣味』一九〇八・九)
- ⑥ 「怪談(Ⅲ)」(『勸銀月報』一九〇九・七)

「怪夢」は、「アンドリュウ、ラング氏の集めた話の中の二三をここに書い」たものや、「アルフレッド、クーパー氏の書いたもの」からなる作品である。本作品は葉舟が怪談収集を始めるきっかけや、参考となったものだと考えられる。葉舟によれば、ラングらは集めた話をできるだけ「其儘書い」ており、本作はその翻訳にあたる。

「怪夢」で取り上げられる怪談では、人物の固有名詞が記述され、怪異が起きた日時や場所なども明示される。このよう

な特徴は、葉舟がのちに執筆する怪談ではあまり見られない。葉舟の怪談では、人物名や地名などの固有名詞は伏せられることが多く、日時も「或る夜」のようにぼかされている。しかしラングの「怪夢」を紹介するにあたって、葉舟はラングらの著作に掲載された内容を抽象化したりぼかしたりすることなく、翻訳を行っていた。

では、葉舟は実作にあたって、どのような怪談作品を目指したのであるうか。執筆した作品の特徴を確認しておこう。

「怪談（Ⅰ）」では六つの話^⑥が紹介されているが、まず冒頭で次のようなことが前もって断られている。

この話はただ親しく聞いたと言う事に重きを置いたから、話の種類が極く雑多である。

それと、も一つ、これ等の話を自分は信じている。自分の神経は少くとも疑わずに聞き得る。……と言う事を、断つて置きたい。

葉舟は「親しく聞いた」ことを重視しており、「親しく」という語をしばしば用いる。この言葉は一体何を意味するのであるうか。葉舟が用いる「親しく」という語がもつ意味について考えたい。

「怪談（Ⅰ）」に収録された六つの話のうち、三つの話の導入で「親しく」という言葉が用いられている。そのうちの「影の人」という話では「これは自分の母が親しく話した話し」として語り出される。話者は葉舟の母であるが、この「親しく」という語は、血縁であることとはあまり関係がないようである。ここで用いられる「親しく」とは、葉舟が母に直接その話を聞いたという程度の意味として用いられている。

「鶏の声」という話では、次のように語り出されている。

これは、三十七年の七月に、今ロンドンに住っている高村光太郎君と、一所に赤城山に登った時の事で、高村君が

親しく出くわしたと言うので話してくれた話がある。

ここでは、「影の人」冒頭とは異なる文脈で「親しく」という言葉が使われている。この「親しく」は、葉舟と高村光太郎との関係を指し示して使われた言葉ではない。また、聞き手が話者から直接話を聞いたという点で「影の人」と同じ性質を持つが、それを説明するためにこの言葉が用いられているわけではない。文脈を踏まえれば、光太郎が怪異と「出くわした」ことに対し、「親しく」という語を用いている。つまり、光太郎自身が怪異の直接の目撃者であることを指しているのだ。

つぎに、「大入道」という話の冒頭を見てみよう。

これはついこの頃上京した太田みづほのや君に聞いた話だ。

或る時太田君と偶然窪田君の家で落ち合って、それから三人で寄席に行った帰りが、電車の中で、自分がふっとそんな話をする、太田君は、

「そう言う事はあるもんだ。僕も一度親しく出くわした人に話を聞いた事がある」……と言ってこの話をした。

この導入を経て、物語は怪談話へと移っていく。話者と聞き手が直接顔を合わせて話しているという点では、先の二話と同じ性質を持っている。ただし、最後の例で使われている「親しく」は、「影の人」同様、怪異を直接目撃したという意味である。なお、怪異の直接の目撃者は話者の太田ではない。太田は怪異を直接目撃したとする人物から話を聞き、それを葉舟に対して話しているわけだ。ここでは、カギカッコを用いて太田の話をまるで再現するかのように書いてあるが、あくまで葉舟の手によるフィクションであろう。だからこそ、葉舟によって用いられる「親しく」という語彙が登場して

いる。

「怪談（Ⅰ）」で用いられた「親しく」という語が使われた文脈を踏まえると、(1)怪異の体験者から直接聞いた話、(2)怪異を直接体験したり目撃したりした話、という二つの意味が含まれる。つまり、ここで使われた「親しく」という言葉によって、怪異とその目撃者との関係性、語り手と聞き手（葉舟）との関係や距離感が確認できる。聞き手である葉舟との距離を測るものさしとして、「親しく」は用いられているのだ。

葉舟が重きを置いたという「親しく聞いた」とは、この(1)にあたり、つまりは葉舟自身が聞き手の立場となつて、直接話を聞いたものを集めたということにつながる。そして、それはときに(2)を含む怪談であつた。

「怪談（Ⅰ）」では、怪談・奇談を取り上げながらその真偽をはかるような、また、価値判断を下す視点を含んでいるような節がある。

「末期の心」で取り上げられた怪異に対して「ありふれたものだ」と評価したり、和尚の話に対して「自分はこれを全体として信ずる事は出来ない」と述べたりするなど、ある価値基準に基づく判断に従つて、怪異を取り上げる。「怪談（Ⅰ）」冒頭では、「親しく聞く」とこと併せて「これ等の話を自分は信じている」ことが述べられていた。

そのほかにも、「死んだ姉」に登場する宮の所在が分からず、「聞き違いがあるかもしれないから違つていたとせば何れ訂正する」という、自らの間違いも想定し、場合によっては内容を訂正しようとする姿勢がみられる。ここから、興味をそそられる怪異を単に列挙したわけではなく、その信憑性にも気を配つて、葉舟は怪談を集めていることがわかる。それゆえに、怪異と遭遇したことや、怪異とかわつた人物から直接話を聞いたということ、「親しく聞いた」ことが、話の信用性を高めるための要素として重視されているのだ。

ラングに触れたことがきっかけのひとつとなり、葉舟が怪談紹介を行ったことに言及したが、「怪談（Ⅲ）」の冒頭でもラングの名があがっている。これまでは「アンドリュ・ラングの著書の中から、怪談を翻訳し」て掲載したが、今回取

り上げるのは、「自分が親しく聞いた話の中で面白いと思ったのを五六、ここに紹介する」というもので、「怪談（Ⅰ）」に通じる姿勢を見せている。

「怪談（Ⅲ）」の「若い女」という話において、「これはA氏の近親の人で母さんと言われる人が親しく見たと言う話」として語り出されている。それに次ぐ「影の人」という話でも、「親しく」という言葉が冒頭部分に登場する。

これはS氏と言う学生から聞いた話であるが、こう言う幽霊がある。

影のような人だ。影のような人が偶然と立っているのを見た人がある。（これは、自分は信ずる。自分の近親のものにもそれを見たとき、話したのを聞いた事がある位だ。）

ここでは、「S氏という学生から聞いた話」の信憑性を保証する裏づけとして、「自分の近親のものにもそれを見たとき、親しく話したのを聞いた」ことが挙げられている。怪異を「見たとき親しく話した」人がいることが、怪談の真偽を判ずる材料とされているのだ。

また、「怪談（Ⅲ）」の冒頭では、「前口状」として、読者から怪異譚を集めようという旨の希望を書いている。

で、序言のついでに、自分は読者諸君にこう言う事を希望する。自分は今、或目的を以て少しくこの種の話を集めて見ようと思っている。この企については、広く世間の話も聞きたく思う。それでもし諸君の中で、よい話をお持ちの方は、独り蔵してしまわれずに、手紙でなり、又近い処の方ならば自分の家をお訪ね下さるなりして、話して聞かして戴きたく思う。ただし、もし手紙を下さるならば、その事件を決して文学的に修飾せられぬように希望します。自分の望むのは名文が拝見したいのではなく、よいお話を集めたいのです。で、なる可く事実をまげぬよう、誇張し

て凄味を付けようとせられぬよう。(これは却つてすくなくなるものですから。) 御注意を希望します。

葉舟は怪異を集めるにあたり、「近い処の方ならば自分の家をお訪ね下さるなりして、話を聞かして戴きた」いと述べている。直接会つて話を聞きたいという希望には、「親しく聞」くことを重視する葉舟の姿勢がよくあらわれている。一方、もし手紙であれば、「文学的に修飾せられぬように」と呼びかけている。凄みのある「名文」にすることによって、事実がまげられることを懸念している。

葉舟にとって重要なのは、誰かが体験した怪異譚を集めることであつた。そして同時に、「誇張して凄みを付け」た文章では、その事実性が失われるおそれがあるという意識が葉舟にあつたことが読み取れる。

しかし、事実譚としての怪談収集を目論んだからといって、葉舟怪談がまったく創作色のないものであつたかと言えば、決してそうではない。①から③のテキストにみられるように、喜善の話をもとにしながらも、内容や表現が異なる作品のバリエーションを生んでいる。しかし、共通して「会話の形で展開されている」⁽¹⁸⁾ために、それが本当にあつたやりとりのように読めてしまうのである。

「怪談(Ⅰ)」の「鶏の声」では、高村光太郎君から聞いた怪談が紹介されている。夜に鶏の声を聞くという怪異に出くわしたときの出来事が語られ、茫然とした光太郎の姿が描出される。

全く心が迷つてしまった。道を迷つた筈はなしとは思ふが、全く途方にくれてしまつて、地^じ辺^{べた}に座り込んでしまった。座つてじつと気を落ち付けた。ものの三十分もそうしていたらう。そこで立ち上つて歩るき出したが、もう鶏の鳴く声はしなかった。

と言つて、高村君はこうつけ足した。

「これはなんだね、幻覚とか言うものの、声を聞く方だね。……それでやつと地獄谷の家にたどり付いたが、その時はもう夜の十二時過ぎ一時ごろだった。そして道も別段違つてはいなかった」

注目すべきは、怪異の顛末を引き受けて、語り手としての光太郎自身が登場することである。怪異が起こった赤城山から場面が急転し、怪談を語る光太郎と、それを聞く葉舟という2人の構図が現出するのだ。いかにも光太郎が話し終えたかのような演出によって、活字を追う読者の耳にまで語り手の声が響くのである。

四、おわりに

柳田は、喜善から聞いた遠野の怪談を扱うにあたり、取り上げたものを「目前の出来事なり」とし、「此書は現在の事実なり」とことわったことで、取り上げた怪談の価値を高めようとした。同時に、喜善という語り手の声を消し、怪異をラベリングすることで「フェアリー、テールズ」を「山奥の或る部落の生活」へと変化させた。それが、柳田なりの真実らしさの保証であった。しかしそれは、鏡花の批評にあるように、幻想性が失われ、陳腐さが勝る結果を生み出してしまった。柳田が真実らしさを保証するために喜善の語り口を削除した一方で、むしろ喜善の声を装うことによって、真実味を生んだのが葉舟であった。葉舟は語り手の声を再現することによって、怪談をやり取りする卑近なコミュニケーションを現前させた。そしてそれは、葉舟の手による遠野怪談に限らず、多数の怪談で見られる彼なりの工夫であったといえよう。葉舟は「親しく聞いた」話者の声を装うことで、真実味を保証しながらも「フェアリー、テールズ」として幻想性を残そうとしたのである。

注

- 1 柳田國男『遠野物語』（自費出版、一九一〇・六）
- 2 石井正巳は「草稿本「遠野物語」」の書き入れ（『遠野物語の誕生』筑摩書房、二〇〇五・八、六九～九〇頁）において、『遠野物語』の草稿本には、あとから書き入れられたと考えられる数字や地名が確認できるとしている。そのため、『遠野物語』は主體的な聞き手である柳田なしには、成立しなかったと主張する。
- 3 島崎藤村『遠野物語』（日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究資料叢書柳田國男』有精堂出版、一九七六・五）二七九～二八〇頁（初出、『中学世界』一九一〇・七）
- 4 田山花袋「事件」、「印象主義」、「印象に富んだ書」（『定本 花袋全集』第一五卷、臨川書店、一九三七・一）三四九～三五〇頁（初出、『インキ壺』（『文章世界』五卷九号、一九一〇・七））
- 5 泉鏡花「遠野の奇聞」（『鏡花全集』第二八卷、岩波書店、一九四二・一一月）四六二～四七〇頁（初出、『新小説』一九一〇・九月、一一月）
- 6 石井正巳「Ⅸ 泉鏡花と『遠野物語』」（『遠野物語の誕生』筑摩書房、二〇〇五・八）二七〇～二九九頁
- 7 前掲5、四六五頁
- 8 水野葉舟「遠野物語を讀みて」（日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究資料叢書柳田國男』有精堂出版、一九七六・五）二八五～二八七頁（初出、『読売新聞』一九一〇・一二・一八、別刷一面）
- 9 前掲8、二八六頁
- 10 岩本由輝「二、聞きたるまま―水野葉舟の『遠野物語』」（『追補版もう一つの遠野物語』、刀水書店、一九九四・二）三八～六八頁
- 11 固有名詞だったものが「某村」や「或る人」などに置き換えられている。
- 12 ①から⑥までの葉舟のテキストは全て『遠野物語の周辺』（横山茂雄編、国書刊行会、二〇〇一・一一）によった。なお、「怪談」（Ⅰ）から（Ⅲ）の初出タイトルはどちらも「怪談」であるが、『遠野物語の周辺』において、「怪談」には便宜的に（Ⅰ）

（Ⅸ）が付されているため、それに倣った。引用箇所の特号は、ことわりがないかぎり論者によるものである。

13 『遠野物語』の一〇〇話と葉舟の①・②それぞれの話の展開の比較は、前掲10の岩本論文に詳しい。

14 前掲2、三二―三三頁

15 前掲12に同じ。

16 六つの話は次のような内容である。文壇関係者の名前はそのまま表記し、そうでない者は頭文字などを用いて名前が伏せられている。

一、死んだ姉（佐々木鏡石君の話）

二、鶏の声（高村光太郎君が話してくれた話）

三、影の人（自分の母が親しく話した話し、自分も変な事に出逢った）

四、大入道（太田みづほのや君に聞いた話）

五、壁の顔（C―君と言ふ友人の話した話、S―君からも聞いた）

六、末期の心（或る人が話してくれたもの）

17 引用特号は原文のままである。

18 前掲10に同じ。

〔付記〕 本論引用は、旧漢字は全て新漢字に改め、仮名遣いは本文のままとしている。ルビは一部を除き省略した。

（博士後期課程）